

戸田太郎の思い出

大塚喜子

コロナ禍の中で喜寿を祝った戸田太郎の話である。

戦後十年を経た東京・渋谷（上原・西原・幡ヶ谷）界限に、もはや敗戦の痕跡はなかった。

節分の頃だった。前の日に八幡神社の豆まきで、われ先に拾った数十粒の煎り豆が太郎のズボンのポケットの中に残っていた。

休み時間が終わって、教室に戻ると、一人の男子生徒のセルロイドの筆箱の中のお金がなくなっていた。何故その生徒が、この日に三百円ものお金を持っていたのか知らない。

騒然となった教室が静かになると、生徒らの視線は、一か月前に転校してきた鼠色のスカートをはいた女の子に集まった。女の子に盗癖の噂があったわけではない。転校以来、クラスの誰とも話さず、どんな時にも笑わない……偶に発する消えいりそうな声が周りを苛立たせた。その苛立ちが、うってつけの機会を与えられたのだ。

東京学芸大学を前年に卒業した、クラス担任の男性教師は、やたら民主主義という言葉を使っていた。それは当時の流行言葉だったが、太郎らに民主主義は理解できない。

教師はこの一件を（皆の自主的解決に任せる）と言って逃げた。太郎と花江は生徒同士の選挙で選ばれたクラス委員だった。二人は女の子と放課後の教室で向き合うことになった。（話し合うことこそが民主主義だ）というようなことを担任教師は言った。

太郎に臆する気持ちなどない。女の子に対する生徒らの無言の視線が太郎に自信を与え、民主的に選ばれた学級委員として、誇らしくその役を引き受けた。女の子に告白させて、この一件を解決して見せる……と言う気負いがあった。

花江と太郎は鷹揚に椅子に座り、女の子と向きあった。石炭ストーブはとっくに火が落とされ、二月の放課後の教室は寒い。さつきから、女の子は一言も口をきかない。

思い出したくないのだろう（この事は誰にも言わないから、本当のことを言え）とか（校庭で僕たちが拾ったことにする）など、思いつく限りを並べても、女の子は遠くを見据えて、細い息を吐くだけだ。夏物の薄手のスカートの下で細い足が小刻みに動いていた。

早く決着をつけようと立ち上がった太郎は、女の子の胸ぐらめがけてポケットの中に残っていた煎り大豆を握り締め、投げつけた。

暫くすると、女の子のスカートの裾から水が流れた。こんなに出るものかと驚くほど長く、夕日に光りながら床の木目に沿って、豆と一緒に流れた。

花江は立ち上がると、掃除用モップでそれをふき取り、ポケットからハンカチを取り出して女の子に差し出した。女の子は「ありがとう」と言った。太郎と花江が女の子の声を聞いたのは、これが始めてで、そして最後だった。事件はうやむやになり、間もなく女の子は転校した。誰にも消息は知らされなかった。

【当時の公立小中学校の授業は教室と教員が絶対的に不足していた。早出のクラスの生徒は、八時一五分に登校して授業を受け、給食を食べて十一時半に下校、遅出の生徒は十一時四十五分に登校すると、先ず給食を食べてそれから授業を受けて三時半に下校した。一クラスの生徒数は夫々平均六十三名で一人の教師がこの二つのクラスを担当した】

高校受験を控えた中学三年の九月、それは何の前触れもなく訪れた。気づいた時はビックリして思わず辺りを見回した。

朝日の中で広がる濡れた地図を眺めて（これは芦ノ湖だ）と呟いた。そうする以外なかった。布団を押し入れに突っ込んで、素知らぬ顔で登校した。夜になると、芦ノ湖は隠岐の島に変わっていた。

母が「これは夜尿症だ。病気だから早晩治る・・・」といいながら近所の内科医院に連れて行ってくれた。顔なじみの女医さんが処方してくれた漢方薬は全く役に立たなかった。

以降、太郎は布団の上のビニールの敷物が濡れると、小学校の放課後の教室で向き合ったあの女の子を思い出した。

期末試験の最中の下校時、中学の体育館の前で花江が

「ミーの行方が判らなくなったの……」と言いながら数日前に拾ったという猫を黙々と探していた。一緒に捜していた友達が一抜け二抜けしていくのを「ありがたい」としおらしく頭を下げる花江をみて、太郎は引き下がれなかった。

暗くなりかけた体育館の外階段の下に蹲っているミーを見つけたのは太郎だった。辺りに誰もいなかった。花江は太郎に近づくと涙をためて「ありがたい」と言うと、素早く唇を重ねてきた。一瞬の事で階段の手すりを握ったまま直立不動でいる太郎に花江の声が被さった。

「ミーの目は戸田君が豆を投げつけた、あの女の子の目に似ているワ？昨日小学校の校庭の砂場に捨てられていたのヨ。戸田君はどこ的高校に進学するの？私は都立駒場高校に行くの。ミーがいると勉強に集中できないの。だから戸田君の家でミーを預かって……お願い」お願い……と言うより命令だった。

太郎にミーを抱かせて、隣の公務員住宅の階段を勢いよく駆け上がっていく花江を見送った。

ミーはビニールを敷いた太郎の布団の上で手足を伸ばし、目を半開きにして機嫌がいい。太郎の寝床が気に入ったようだ。母が

「この猫はビシニアンと言う血統の猫で、捨てられていたなら、何かの間違いで雑種とかけちがったハーフ猫だわ。飼い主が邪魔になって捨てたのよ。可哀そうね。可愛がってあげましょう」と言った。

ミーを抱いて寝るようになって太郎の夜尿症はピタッと収まった。夜尿症は治まったが高校受験は散々の結果で、慌てた父親が手を尽くして私大の付属の高校に進学することになった。母親は

「猫のお陰で夜尿症が治った」と学業の事には全く頓着しなかった。

最難関校と言われる駒場高校に進学した花江は。偶さか太郎と出会ってもミーの事は何も言わなかった。忘れているのだろう。暫くしてミーはいなくなつた。母も太郎も別段探そうとしなかった。

大学三年生の春に値段の高そうな猫がやってきた。顎は細長くすっきりしていて、銀灰色の毛並みに雑多な色は混じっていない、白昼は勿論、夕暮れの鶉

紺色の中でも典雅で辺りを魅了した。ミーのように雑種とかけちがって生まれた・・・ということではなさそうだ。叔母から聞いたところによるとロシアンブルーという種類らしい。太郎はこの猫に（アーニア）と命名したが、母はミーと呼んで可愛がった。

庭で猫の怖気だつ声が出て、カーテンを開けると、満開の桜の木の先にアーニアはいた。月光に染また窓ガラス越しに、二匹の猫のシルエットが飛び交っている。一匹はアーニアなのだが、もう一匹はアーニアよりずっと大きくて見かけない猫である。

二匹の猫は空中で声を出しながら激しくぶつかると、爪を空に走らせて、睨み合っている。その跳躍を太郎は呆然として眺めた。一幅の屏風絵のなかの猫を見ているような気がした。

暫くして空の高みで月が雲間に隠れると、風が出てきた。桜の大枝が揺れて、花びらが一斉に地面におちた。

明け方の月が薄紫に変わると、大きな方の猫が板塀をよじ登った。向こう側に消える前の一瞬、塀の上の花曇りの空を背に、その猫は懐かしそうに太郎を振り向いた。ミーだと気づいた太郎は「ミー」と呼びながら庭に駆け下りたが、ミーはそれっきり太郎の前に現れなかった。

終わり

